

松田解子——人と文学——

渡邊 澄子

Tokiko Matsuda — Her Life and Works —

Sumiko WATANABE

はじめに

二〇〇四年四月一日、アジュール竹芝で「松田解子さんの白寿を祝う会」が盛大に開かれた。「白寿」という年齢に戸惑いを覚えるほど矍鑠として、介添えも必要とせずに張りのある大きな声で戦争への危惧感を表明したスピーチ（お礼のことば）は参会者たちを叱咤激励するものだった。会場の受付には『松田解子自選集』全十巻の第一回配本巻が飾られていたが完結を待たずに八ヶ月後の十二月二十六日、百歳の誕生日まで七ヶ月を残して没した。「あー、おれあ幸せだ」とつぶやいて娘の腕の中で永眠したという。辛酸な貧困のなかで何の後ろ盾もなく、文学上の師も持たずにひたすら自己練磨によつて成し遂げた松田解子文学は制度化された差別構造との闘いと緬い合わされて生まれたものだった。彼女の文学の本格的始動は戦後であるが、その根は生まれ育った荒川鉾山にある。エネルギー供給源の変化によつてかつて栄えた鉾山はすでに閉山の状態にあるが、鉾山と戦争とが密着していた時代を彼女は生きてきた。松田解子の文学世界の核として差別、戦争が据えられている所以である。とすれば、まず、松田文学の根っこであるその生育環境を述べなければなるまい。

三人の父を持つ娘

松田解子は一九〇五（明治三八）年七月一日、秋田県仙北郡荒川村荒川（現・大仙市）の三菱経営の荒川鉾山の長屋に、父・松田萬次郎、母・スエの長女として生まれた。日露戦争の終結期である。本名ハナ。兄一人に義妹一人。秋田は金属鉾山最多の県で、荒川鉾山は県内中規模の銅山だった。鉾山で働く労働者の奴隷的苛酷労働は軍需産業として戦争に連結する。骨の髄まで植え込まれた天皇制は現神人天皇イコール三菱として利用された。天皇の名によつた至上命令は増産のかけ声で労働災害を激増させる。解子は満一歳の誕生日直後にトロツコを引いていた父を失っている。

門鑑の厳しい監視下におかれた鉱山労働者に鉱山外への自由出入りは許されない。許可を得た場合でも駅までの往復六里は徒歩。会社関係者の足はトロツコだった。暑さに喘ぎながら門鑑に辿り着いたところで父は倒れてコト切れたという。人命無視の苛酷な環境のもとで奴隷労働を強いられる鉱山労働者の絶え間ない死は安全対策への費用を惜しんだことに起因するが、ほとんどが「本人の不注意」と片付けられ、まともな保障もされないばかりか、たとえ妻が鉱山労働者であったとしても七日以内に長屋を明け渡さなければならぬ。長屋居住を許されるのは戸主の男に限られていた。生家の家庭事情が複雑で既に両親を失っていた母に帰る家はない。居場所確保のため、十歳を頭に六人の子持ちの男と再婚するが彼は重度の塵肺で一年も経ずに死ぬ。またもや居場所探しとなり、飯場生活の溶鉱炉で働く精錬夫を三人目の夫とする。解子は三歳までに三人の父親をもつことになる。解子に実父と二度目の父の記憶はない。三度目の父は恐怖の存在だった。精錬夫はもろに鉱毒を吸うことにより常軌を逸した振る舞いをする者が多いとも言われる。労働現場で権力者の監督の顔色を窺い諂う弱者は、家では暴力を振るう強者に豹変する。母は夫の暴力下で朝早くから夜寝るまで働き詰めだったが、解子も幼時から片時の手休めすら許されなかった。

解子に人権意識が芽生えたのは小学校の入学式当日だった。師範学校新卒の鈴木トク先生は、解子を「社員の子」と対等に「松田ハナさん」と呼んでくれたのだ。それまでは義父に「こら、ゲホ（「おでこが広い」意だがこの使い方は罵声）」「役立たず」「一文にもなりやがらないで」「地蔵さまガキ（「役立たず」の意）」としか言われたことがなかった解子にこの時「個」の意識が生まれた。トク先生は翌年、結婚退職してしまったが、『中央公論』や『改造』などを読む代用教員に甘んじ続けた年配の伊藤佐太郎先生や、クリスチャンで若い佐藤喜雄先生が、松田文学の要となる〈差別のない平等社会〉思想形成の〈種蒔く人〉であったことの意味は大きい。学校は彼女にとって胸一杯呼吸のできる楽園だったが、家では朝晩の水汲み、米とぎ、掃除、飼っていた鶏・豚・牛の世話と間なしに追い使われ、それでも義父に怒鳴られなぐられた。それは十三、四歳の頃だった。命じられて営林署の山に逃げた牛探しに行った時、暗闇の無人の山中で義理とはいえ父と名のつくこの人にいきなり犯されかかったのだ。驚愕の余り大声で叫びながら必死に逃げたがその時の恐怖感はいくらトラウマとなって彼女を脅かし続けた。その後、義父の解子に対する冷酷さは増幅した。耐えかねて母にここから逃げようと訴え、「逃げてでもいいところはない、逃げられはしない。おかあはお前を守るから我慢してしつかり勉強し、おかあのようなになるな、産婆か看護婦か学校の先生になって女でも一人で生きていけるようになってくれ」と涙ながらに言われ、この時、解子に自立の意志、目標の杭が打たれた。

鉱山からの脱出を願う一心から日本赤十字社の看護婦見習い試験を受けて合格する。ところが入寮の数日前、鉱山事務所に義父が呼ばれて娘を事務所の小使いとして出すように命じられる。厭も応もない。一九二〇（大正九）年、解子満一四歳の時である。時代は事務の機能化、効率化からタイピスト採用の必要に迫られていた。専門学校出の正規のタイピストを雇うとなれば十何円の月給〔一〕を支払わねばならない。小学校で成績

優秀の解子が狙われたのだった。四等米と南京米が七対三の坑夫米一升分の二十銭が日給の小使い待遇で七時出勤、事務所の掃除や整理、出勤の所員にお茶を配ってからタイプライターの前に。三千字の漢字を即刻頭に叩き込むことが初日の仕事。月給計算で五円六十銭から八十銭だが貰うと袋ごと義父に渡し、その中から東京女子商業学校発行の『女学講義録』代に送料・文房具代を加えた一円五十銭だけもらうのを常とした。「三菱合資会社荒川鉱山」の社員は大資本の社員だけにこの職場は解子の馴れ親しんできた垢と汗、坑内着に染みこんだ亜硫酸ガス臭とは異なりポマードの香料が充満する異空間だった。鉱山長は東京帝大法科出のアメリカ留学体験者で役職上位の者の多くは大学出だ。庶務課の隅に席を与えられた解子にとって嬉しい役得は、整理も仕事の何種類もの新聞や『太陽』『我観』『日本及日本人』などの雑誌を覗けることだったが、さらに誰ののか書棚に文学書があつたのだ。昼食時、上位者が倶楽部の食堂で和・洋食の特別料理を食べに席を立つのを待ちかねて、下級事務職員にお茶を配ると、そそくさと小使い室の片隅で「がつこ（漬け物）」と「ぼたこ（塩鮭）」の弁当を掻き込み、残りの時間の寸時を惜しんで書棚の『若きヴェルテルの悩み』やハイネの詩集、二葉亭四迷、国木田独步、徳富蘆花、与謝野晶子などを隠れ読むのだった。渡された文書をタイプに打つ仕事を通して会社の動きもある程度察知でき、青年団の仲間に情報を流すこともできた。「賞与」支給日は解子に社会の実相を教えた。所内の全職員、さらに周囲の全操業現場の役職者たちが鉱山長室にかしこまって入り、彼の手から月給の何ヶ月分かの「賞与」を低頭して「いただく」のだが、社とは本来無関係の村長はじめ主だった吏員、解子の母校大盛尋常高等小学校の校長以下全職員、そして警察派出所所長以下請願巡査の末端にまで「賞与」の角封筒が手渡されていたのだ。彼らは社員に先立って隠れるように来て解子の月給分ほどを貰っていく。その金の生み手である鉱夫たちはヨロケ（塵肺）で労働に耐えられず休めば情け容赦なく賃金カットされ、咳を堪えて精勤しても賞与とは名ばかりの慰労金が渡されるだけなのに。社外者の「三菱様々」は金の力だった。ところが代用教員の伊藤先生は、薄給のなかから困窮者の生徒に文房具を買い与えたりしながら、自分は三菱に雇われているのではなく国の自治体に属する教職者なので鉱山長から金を貰う謂われはないと受け取りを拒否し続けて憎まれ、警戒人物視されていた。

ここの職場は解子に資本家が労働者（稼ぎ者）をとことん搾取するものであることを教えた。虱や垢や饅えた汗の臭気のなかで、漬け物で湯漬け飯が日常の彼らにとつての望みはせめて週一度、いや月一度でもいい、納豆や豆腐汁を口にしたいというものだったが、社員たちの生活は、鉱夫たちが見たことも口にしたこともない高級料理の匂いを連日漂わせ、宴会時には秋田市から川反芸者が呼ばれたりもする別世界だった。だが、その「上品」「高級」なこの舞台は凄惨なリンチ場でもあった。目をそむけたくなるリンチ場面を連日のように目にする解子は「やんだ（いやだ）、やんだ、ここ、辞めてえ」と思い続けていたある日、連れてこられたのはあの自分を犯そうとした憎しみの対象でしかなかった暴力義父だった。盗伐がみつかったのだ。解子は、義父の殴られ蹴られて血を流し、瞳孔まで開いて檻欄雑巾になりながらも「三菱様」に諂う屈辱的な姿を見せつ

けられたのだ。憎み続けてきた暴力義父は強者ではなく惨めでちっぽけな一介の低階層労働者にすぎなかった。その人に自分とはかく育てられたのだ。本当の敵は義父ではなかった。落盤やハツパによる死や傷害も日常的茶飯事として「命」は無価値視され、その「命」を食い物にして栄える資本家とそれを援けることで豊かさを享受できる階層のある現実を知った事務所勤務の三年間は、解子にとってまさに「私の大学」となった。想像を絶した凄絶な生活環境だが、解子には彼女の人間形成に力を貸した人が何人もいた。差別を排した人間平等思想を植え付けてくれた伊藤先生は、女学校卒同等の学力を身につけて師範学校本科二部の試験に合格すれば、公費による一年間の在籍で正教員の資格がとれる道のあることを教えてくれた。両親が選鉱場通いの共働きだが坑夫家庭では珍しい一人っ子の鹿子畑イクとは仲良しで、学校帰りに彼女の家と一緒に宿題をするようになっていたある日、彼女の家で表紙のめくれた分厚い本を見つけて借りて帰るが、それは黒岩涙香訳の『噫無情』だった。ユゴーも涙香も知らず虜になった。志を持つ青年たちの密かなグループの勉強会に参加するようになって吉野作造を知り、母校の小学校新任教師が開いた日曜学校にも通い、この日曜学校の仲間に坑外夫の兄をもつ藤田フサがいて親しくなった。彼女の兄が世界文学全集を隠し持っていることを知ってからは、ここは解子の図書室になった。伊藤・佐藤その他の先生から受験勉強を助けられ、青年仲間が話し合う鉱山労働者の待遇改善要求問題などを通して解子の視界は社会的広がりをもつようになっていった。

師範学校入学、そして、教職に

解子の師範入学は事務所の誰も予測していなかった。高小卒の坑夫の子が女学校卒に伍してしかも一年間で正教員の資格をとれるこの試験に合格するはずはないと。人間扱いされない鉱山労働者の現実、リンチの日常に堪えられず辞表を出したものの解子自身にも合格の自信はなく、落ちたら坑内外どこでもいいから稼がしてほしいと膝を屈して頼んでいたのだ。

受験生に解子のような貧しい身なりの者は見あたらず、不安になっていたとき、向こうに彼女と同じような粗末な服装の桃割れ髪の娘がいた。あの人と一緒にと急いで近づき頭を下げた途端、目から火が出た。鏡に映った自分だったのだ。試験が終わり受験生は皆帰ったが解子は一人残されて全科目の試験をされた。夕闇が迫った頃、体操の試験に当たった教師の小馬鹿にした態度から不合格を覚悟したが見事に合格した。

解子は九五歳時に、師範に合格して教師になったのは自分の生涯にとって幸いなことだっただろうか判じ兼ねると述懐しているが、必要な通過点だっただろう。寄宿舎生活はこれまでの鉱山生活とは別世界の経験だったのだから。吹けば飛ぶような長屋とは雲泥の差の校舎と寄宿舎で、しかも官費でそれぞれ専門の「偉い」先生の講義を聞き、鉱山では目にすることもなかった純内地米のご飯に工夫のされたおかずの朝・昼・晩。日曜には和菓子のほかにおやつもでる「身にそぐわない暮らし」だった。家から送金皆無の貧しさだが孤独ではなかった。友だちの誘いで秋田魁新

報の記者や労働者の集まりに参加し、熱気に溢れた政治論に興奮する体験もあった。ところがある日、突然、全校生徒・教員が集められて校長の訓話があった。いきなり有島武郎の名を挙げて「陛下にたいして不届きな作家である」、「或る女」や「惜みなく愛は奪ふ」など「いやしくも将来陛下の赤子を教える教師ともなるうものは決して読んでならぬ悪書である」と声を荒らげて説いたのだった。それほどの悪書とはどんなものか読んでみたい。だが、図書室はもちろん県立図書館にも本屋にもなかった。有島の自裁に校長は生徒の動揺を恐れたのだろうか、有島がそのような受け止められていたことは興味深い。夏休みとなりみんなは帰省したが汽車賃のない解子は居残った。そこに関東大震災である。東京に出ていた兄の逃げ帰りを秋田駅で待ち続けたが現れない。汽車賃をどう工面したか記憶はないが、ともかく居たたまれず荒川に帰った。兄の安否は不明で、徴兵検査の出頭状を手に母はおろおろしていた。震災のどさくさを口実に兄は兵役逃れをしたのではないかと解子は思ったが、事実その通りだったらしい。

この休み中に本好きの仲間たちを尋ねまわって有島の主だった作品を読むことができたが有島の文学世界は、翻訳物中心に乱読してきた解子にとって新鮮かつ衝撃的感動を呼ぶものだった。社会への知見が広まるにつれて教職に就くことに恐怖感がわくが、伊藤先生に「教えると思うな、学ぼうと思え」といわれて納得。この一言は教職在任中の座右の銘となる。

鉱山を離れて一年間後、晴れて正教員として生徒の前に立つ日がきた。たとえ、どんな山奥の分教場でもいいから荒川鉱山には帰りたくないと思っていたのに赴任校は母校の小学校だった。一九二四（大正一三）年四月の始業式に「訓導」として、満一八歳の解子は男女九人の教師の一人として、七一人の生徒とその親たちの前に立っていた。一段高い壇に校長、反対側には来賓の三菱・荒川鉱山長、村長、軍医出の鉱山病院長と村の有力者が務める学務委員、軍服の胸に勲章を並べた鉱山の檀家寺の住職が控えている。厚化粧によそ行きで着飾った三菱の職制の妻たちの視線が、化粧もしない粗末な紋付き・袴の解子を、飯場の娘でついこの間まで鉱山事務所の小使だったあの子だ、と好奇の目が解子を刺した。教師になっても、出勤前の水汲み、帰宅後は長屋の生徒の家々を回って豚の飼料の残飯残汁もらいは続けられた。月給四十二円（男は五十円）は袋ごと義父に渡し、その中から五円もらって二円で女子大学の講義録を、残り三円で一切合切の小遣いにしていたのだから、天秤棒に石油缶を前後にぶら下げて家々を回る豚の飼料集めなど断ればよかったのだが、怖くていえなかった。先生のこんな姿を子どもたちは蔑んだろうか。虱や垢にまみれての命がけ労働が日常の子どもたちに蔑みの視線はない。残飯もらいには期せずしての効用があった。本好き仲間の家にも回ったことで本や雑誌の貸し借りが楽になりその延長から仲間雑誌を出す話もちあがったことと、家庭訪問の実質につながったことである。陽の射さない地獄の坑か、または夏冬烈火と毒ガス蔓延の精錬所や粉塵まみれの碎鉱場・選鉱場、あるいは牛馬同然のトロココ押しなどで一生働いてもやつと食べるだけで精一杯、下っ端役人にこずかれながら、運がよくても四十二の「厄年すぎて」の硅肺死か落盤死、その他さまざまな災害死が待ち受け

ていて、その一家の支柱を失えば直ちに追い出される絶望的境涯に対する不安を常に抱えている家庭の個々の現状をより深く知ることでもできた。教え子の親たちの苦悩、悲哀は解子の母のそれでもあった。解子は、ここで一生を過ごさなければならぬ子どもたちにとって生涯一度だけの、奴隸的、屈辱的差別から距離における小学校時代を人間らしく過ごさせたいと強く思い、そのために「いい先生」になろうと努め、アンデルセンやグリムの童話を読み聞かせたりと授業に工夫をこらしたのだが、この工夫は教科書の「キグチコヘイ ハ ラッパ ヲクチ ニ アテタ マ シニマシタ」に破壊される。解子は鉦夫の子どもたちから「いい先生」と慕われ泊まりに来る子も現れた。彼女が坑夫の子に慕われることと鉦山の「お偉いさん」や職員の子を特別扱いしないことは運動して、校長はじめ「会社」関係の子の親から警戒、忌避されるようになる。

この間、仲間で発行したガリ版刷り雑誌『煙』に解子も詩めいたものや小説の真似ごと文章を載せた。夏休み中のある日、間もなく農民文学作家として活躍することになる『種蒔く人』に深く影響された伊藤永之介が来山した。解子も仲間と共に「地下数百尺の坑内深く」まで案内したのだが、これが問題となった。学期始めの職員会議で、女だてらに有名な札付き文士をヤマの不良と一緒に「無用ノ者入ル可カラズ」の規則を破つて坑内まで連れていき、その男との座談会にも出て校長の面目丸つぶれ行為をしたばかりか、高等科の生徒を泊めて同衾したという投書のくるような教職者としてあるまじき行為を重ね、「あぐくにこの詩だ!」と『煙』をふりあげて指弾されたのだ。その頃、小学校を出てすぐ選鉦入りした同級生で本好き仲間の一人小林勝郎に解子は恋心を育てていたが、このような屈辱に耐えきれず、辞職を決意し、二年間の勤務義務を果たすすぐに東京に出る。一九二六年三月末、満二十歳の時だった。

母が手紙を出しておいてくれた田端の義理の叔父の家にひとまず荷をおろしたものの、この家も貧窮下層階級者だった。長期滞在は無理と知って五月、小部屋や木賃宿を転々しながら職探しに奔走して下町の工場の女工となる。間もなくアナキストの団体「戦旗社」を知り、ここに集うアナキストの一人で労働運動家の大沼渉と出会って結婚したのは十二月。小松川で所帯をもって七日目に大正天皇が亡くなり、夫は危険人物視されて検挙される。以後、検束や特高監視の日常となる。翌年十二月に長男を産むがそれは夫が「職よこせ」のビラを配って逮捕された拘留中のことだった。明けて三月十五日、赤貧洗うが如しの毎日だったが、特高三人と制服警官二人に踏み込まれ、三・一五事件の煽りで生後三ヶ月の長男を背に小松川署に連行される。「松田ア、お前、ガキなんか背負って、この運動できると思っているのか」と怒鳴られて釈放されたものの以後、職を得られず、鉦山での惨めな生活どころではない貧窮に追い込まれる。

表現者の道に

鉦山で出したグループのガリ版誌（『煙』後、『黒潮』と改題）に参加したあの時の熱気が忘れられず、詩「乳房」「原始を恋う」、小説「逃げた

娘」を『文芸公論』に投稿して発表されたのは三・一五事件に連座したその直後のことだった。夫が関係する東京自由労組その他の仲間の一人だった三浦克巳に、読売新聞が六枚の掌編小説を募集している、応募してみたらと声をかけられ、賞金欲しさに応募した「産む」が当選し、得た賞金十円は当分の米代と三・一五事件犠牲者へのカンパになった。「産む」(『読売新聞』28・6・4、夕刊)は「逃げた娘」に次ぐ小説二作目だが、作家デビューの緒となった作品といえる。「孕んだ!」と知ったとき恐怖感が襲う。自分が生きるのさえ容易ではないのにどうして親になれるだろうか。惨忍な思いが脳裏をよぎる。夫は留置場だ。だが、胎児に腹壁を力強く蹴られて育てる覚悟と勇気がわき、施療院にとびこむ。十時間の苦悶を経て誕生した元気な男児に幸福感を女が味わっているところに「失業者に職を!」のビラで逮捕された夫が三十日の暗い夜を過ごした「なか」からの釈放を仲間が知らせてくれるという作品だが、この作品の発表は死刑、無期追加に「改正」された治安維持法の公布されたその月である。そのような時節にこのような作品が入選、紙上発表されたのはプロレタリア文学全盛期にあつたからだろう。この作品発表が契機となつて、解子は全日本無産者芸術連盟(全日本無産者芸術団体協議会)に改組。略称「ナップ」の機関誌『戦旗』、さらに翌年結成で加入した日本プロレタリア作家同盟機関誌『プロレタリア文学』に作品を発表するようになり、プロレタリア文学作家の一群の一人となる。一方で、二十八年七月に再刊された『女人芸術』が大事な発表舞台となり、これまで交流のほとんどなかった女性文学者たちとのここでの出会いが彼女の生活空間を広げることにもなる。

『女人芸術』発表(29・8)の注目作「乳を売る」は「産む」の続編だが格段の飛躍を示す感動作である。それは、本学大学院授業でプロレタリア文学の一作として紹介した時、韓国女性留学生が感情移入の「読み」によつて泣き出してしまったことにもいえる。

「乳を売る」は三浦克巳の紹介で貧窮凌ぎに「乳母」奉公した体験の作品化で、乳房にかじり付く生後七ヶ月の我が子を犠牲にして飲ませる相手は「東洋一の時計工場精工舎と銀座の服部時計店」重役の「三歳になるお坊っちゃま」である。容色の衰えを厭った「重役夫人」の代わりに母乳の必要な虚弱なその息子のために乳母兼女中として雇われる。血液検査で悪疾のないことを確認された上で、四時間毎に乳首を消毒し百二十グラムずつ消毒済みメートルグラスに搾乳するのだ。脂汗が流れるほど最後の一滴まで力任せに絞られてもまだ適量に達せず、自分の子に先に飲ませたのではないかと疑われる。初めて知るブルジョア家庭の内部。我が子にとって命の母乳がここでは商品の「ジンニユウ」であり、母乳提供者は商品製造器である。製造器給油として見たこともないビフテキなども食べさせられるが我が子は痩せ衰えていく。プロレタリアの子は生まれながらにブルジョアの餌食にされ、女性の母性すら搾取される階級社会。解子がこの体験をしたちょうどその頃は、天皇即位の「ご大典」を祝う奉祝行事で沸き立っていた。その情景を描いた数行の挿入は痛烈な批評となつて効いている。以後、「風呂場事件」「教育労働者」「白と黒」「ある戦線」などを発表し、『中央公論』や『文藝』に「飯場で」「大鋸屑」、さらに新聞連載小説「女性苦」「白薊夫人」(のち、「女性線」と改題)などを労働運動を続けながら発表し、多作ではないが作家自立への階段をしつかりした足取りで進んでいる。そこでペンネームについて触れておきたい。ア

ナーキストたちと交流して労働運動に参加していたためにどこの職場も長続きせず、解雇の繰り返しだったことで自嘲と抵抗の意を込めて「解雇」「解子」としたつもりだったが、誰かに「ときこさん」と呼ばれて、ああ、そのほうが決まったという。

『女人芸術』と戦争下

乳を売った屈辱の一カ月余の体験は階級意識を思想化させた。だが思想は空腹を満たしてくれない。またもや三浦克巳の配慮で重役家から帰った一ヶ月後位の一九二九年一月始めから年末まで、当時、流人の島のように思われていた伊豆大島の差木地尋常高等小学校の産休教員として長男を連れて赴任する。孤独に過ごす解子の情熱をかき立てたのは送られてきた『女人芸術』の「女性進出行進曲」募集だった。なんと賞金は二百円。応募した解子の詩は見事に当選した。一等は該当なしで二等だったが百円が送られてきて翌年(30)一月号に山田耕作作曲の楽譜付きで発表された。ついでに言えば、百円はこの頃の東京での大卒サラリーマンの月給額に相当する。この当選は『女人芸術』グループとの距離を一挙に縮め、集いに積極的に参加するようになったが、生田花世のような貧困者もいたにはいたが長谷川時雨をはじめ上田(円地)文子、平塚らいてう、富本一枝その他生活レベルの高い人たちが圧倒的に多くて敷居が高かったが、好奇心が気後れを退けた。「お茶会」というものに怖ず怖ずと出かけて人種の違いにうろたえる解子を何の差別視もなく、席をあげて背中の子を抱き取り、お茶の作法も何気ない自然さで気負いのないように配慮してくれたのは上田(円地)文子で、後日、そつと着物をくれたのは今井邦子だったらしい。『青鞥』の尾竹紅吉こと富本一枝はとりわけ忘れ難い人。「清楚というしかない和服の全体像から発してくる、なんとも自然で、しかも抜きん出てモダンな雰囲気」に目が眩んだが以後変わることのない親切を一方的に受け続けた。生涯の思い出は確か二・二六事件(36)の頃だったがロシアの有名歌手シャリアピンの来日時、音楽好きの解子に五円という高額のチケットを買ってくれたことという。一枝自身の生活も決して楽ではなかった筈なのに。

宮本百合子や窪川(佐多)稲子たちとの交流もうまれ、鉾山を舞台とした方言導入の松田解子文学の原型といえる作品が書かれるがその生生発展を阻む戦争の泥沼化時代に入る。

プロレタリア作家として市民権を得ていたものの戦争の時代に入るとプロレタリア文学は圧殺され、組織も壊滅させられて試練の季節に入るが、この時期を解子はどのように過ごしたのだろうか。十五年戦争と呼ばれたアジア・太平洋戦争下に解子は単行本として長編小説六冊、短編集四冊、詩集一冊を刊行していてすでに作家的樹立を果たしているが松田文学の真価発揮は戦後になってからといえる。

解子の戦争下を簡単に見ておきたい。解子自身、何度か検挙の憂き目にあっているが、夫はほとんど入ったり出たりしたりの連続で、出ているときもまともな職業につけず「ニコヨン」で凌ぐ状態だったが常に憲兵につきまといわれての毎日で、よくも生き続けてこられたものと我ながら感心

するほどの乞食暮らしだったと後に回顧している。注目すべきは、ほとんどの作家たちが戦争賛美文学、行動に雪崩れていき、満州へ競ってでかけ、戦地慰問の従軍、遺家族・戦病兵慰問、軍への献金その他に躍起になっている仲間と解子は一線を画している。それは有名作家でなかったお陰で軍に活用されなかっただけのことと後に述べているが決してそうではない。そこを詳述する紙幅はない。証左の一例として挙げられるのは『女人芸術』の後継誌『輝ク』（33・4・41・11）が明示する、ここに集った人たちの姿である。軍部に忠誠を尽くすファナティックな時雨に追従し、岡本かの子、平塚らいてう、高群逸枝までが皇国史観を唱道、唱導し、靖国の遺児慰問の白扇揮毫に百合子まで参加しているのに対して、重箱の隅をつつくようにほじくれば皆無といえないまでも、解子はよく踏みこたえている。

戦争は終わった。安穩の場所と経済的裏付けを持つ特権者の野上弥生子ですら無傷では済まなかった戦争下を、「筋を通した」なんて偉いものではないと後に語っているが解子は立派に筋を通してゐる。敗戦直後の九月に次男誕生後十一年目で長女を出産しているが新日本文学会に加入し、翌年、日本共産党に入党して自己の立場を明確にして活発に活動を始めている。三鷹・松川事件などの作られた事件の犠牲とされた被告救援と人権闘争に全身投入していた五十年八月、京橋公会堂での全日本金属鉱山労働組合連合会の大会を傍聴して花岡事件を知り衝撃を受ける。鉱山で生まれ育った解子にとってひとごとではない。生地から遠からぬ鉱山で起こった事件をそれまで知らなかったことに慚愧し、結核で入院中の夫、夫に感染した五歳の娘をおいて、旅費を借金して現地調査に向かう。

松田解子文学満開——『地底の人々』

解子は一九三六年十一月に「秋田県尾去沢鉱山の沈殿池堤防決壊、泥水で死者250人余」（『近代日本総合年表』）の事件を新聞で知ると、河崎なつに旅費を借りて現地調査にでかけ、この事件をルポルタージュとして発表している。『地底の人々』（51・9・10合併号・12、52・4、5、7『人文学』、以下を書き下ろして世界文化社53・3、改訂版72・6、民衆社）は、一九四五年六月三〇日深夜から七月一日夜明けにかけて起こった「秋田県花岡鉱山で強制労働中の連行中国人、酷使に抗して蜂起、収容所を脱走、憲兵・警防団らと数日間闘い、418人虐殺される」（前記年表）と記された「花岡鉱山事件」の作品化である。この年表には（戦時中の連行中国人3万8935人、死亡6830人）の付記があるがこの年表は一九六八年刊行で重版は重版時までの増補である。とすれば、一九九二年六月に長澤秀によつて復刻された「石炭統制会極秘文書」の『戦時下朝鮮人・中国人・連合軍俘虜強制連行資料集』全四巻（緑蔭書房）は未見だろうから、連行・死亡数は正確ではない。この資料集はコピー版なので文字も不鮮明だ。「極秘」印の押された蠅・蟻の頭ほどの細字の手書きも多く第一級生資料の精査は容易ではない。逃亡者数の記載はあっても虐殺者数は隠蔽されている。

ところで、松田解子が私の研究テーマの一つになったのはこの衝撃的作品を読んだことによる。解子がこの事件に深くコミットしたのは日本人の一人として贖罪、恥辱意識からと、鉱山人の同志愛によると語っているが、確かにその思いの横溢した作品であるが、それだけでなく、解子にとっても日本文学・日本現代史、そして新首相・政権の歴史観を批判する者にとってもこの作品の意味は大きい。

花岡事件は一九四九年八月、二人の朝鮮人が花岡鉱山・姥沢に散乱する遺骨を発見したことが事件発覚の契機となった。事件は戦争末期、国策遂行の為に強制連行された多数の中国人が殺人的酷使に耐えかねて蜂起し、虐殺された事件だが、一九四四年六月、銅増産のための鉱床開発、ダム建設用に中国人二九八名を連行（解子の作品はこの説をとるが、銅増産のためにその前の四月に三百名連行の説がある）の前月・五月に乱掘による坑中陥没で七ツ館坑が崩落し、日本人と朝鮮人が生き埋めにされた惨事があった。惨事につながる花岡川の水路を変える工事が増産のための緊急事となり、その労働力に藤田組が鹿島組に請け負わせて中国人俘虜が強制連行されたのだった。虐使が虐死を激発させる状況に堪え切れず蜂起は権力によって鎮圧され、多数が虐殺・捕縛された事件である。この作品を収めた『自選集』第六巻の江崎淳の「解説・解題」によると、傀儡政権の満州国建国の三二年から四五年にかけて国内の労働力不足補充のために朝鮮人一五〇万人が強制連行されているが、戦争末期には中国人約四万人が鉱山、土木建築、港湾荷役などの使役に俘虜が各事業所に配置され、そのうち花岡には鹿島組九八六名、藤田組二九八名が連行されたという。奴隷労働の苛酷さから抵抗運動が各地で頻発していたらしいがこれほどの多数が一斉蜂起したのは特異だったとも。強制連行は企業の実請に軍・政府が応えて閣議決定されたもので、虐使で虐死させた当事者は企業であつたとしても真の責任は国にあり国家犯罪といえる事件である。この事件は一九八七年に被害者・遺族十一人が訴訟を起こしたものの責任を認める声明が出ただけで九〇年に決裂。九五年、改めての訴訟に東京地裁が請求棄却（九七年）、控訴して二〇〇〇年、東京高裁で企業責任を認め中国紅十字会に五億円を拠出して被害者の生活支援、慰霊事業にあつてることと和解成立の経過を辿る。解子は事件が明るみに出た後現地調査に何度も出かけているが、責任追及のために結成された花岡自由労組に、日中友好協会準備会、朝鮮人団体、共産党（支部）などが協力して遺骨調査が行われ、一九六四年に遺骨発掘・送還運動が開始されたその過程を中心的に活躍し、六六年五月には花岡・姥沢に抛金によって「日中不再戦友好碑」が建てられた時、碑前で解子作の献詩が朗読され、六〇年には、安保条約改定反対運動に挺身していた時だが花岡で遺骨があらたに発見されたことで結成された調査団の団長として現地に出演している。花岡鉱山を含む日本における中国人犠牲者の本国への送還は第八次に及びその数は二七四五柱（一九六〇年段階の資料）に及ぶというが、その後も更に発見されていて実数は不明である。

ところで、解子の作品は、坑道にまで入って検証した何度もの実地調査と、当時まだ少なかった資料や聞き取り取材を重ねて事件の真相を可能の限り調べ、それを自身の鉱山生活体験に重ねたことでより迫真、緊迫性を発揮しているが、虚構化もほどこされた小説仕立てである。とはいえ、

地名や数は事実でドキュメントの趣を呈してもいて、本多秋五の野上弥生子の「海人丸」への評言を借りるならばまさに「ひた押しのリアリズム」
「楷書のリアリズム」作である。

花岡事件の先駆が二人の生き埋め事件だったことは象徴的である。作品はこの生き埋め事件から始まる。「大東亜戦争」開始三年目の一九四四年五月二十九日、戦時下でなければ鉾山は公休日のはずのこの日、国民学校を卒業して間もない子どもつきの残るタツ子はダイナマイト箱を背負って七ツ館坑に向かつて連絡坑道を手探りで歩いている。電灯ひとつない暗闇、ぬらぬらする泥土に何度も足をとられてのめりそうになったり、天井の坑木に頭をいやというほどぶつけても痛いと感じる余裕もなく恐怖におののきながら必死に奥へ奥へと辿っている。少女の念頭には、背中のマイトや雷管を七ツ館坑の切羽で待つ手掘坑夫や削岩夫に一刻も早く渡さなければの思いだけで、坑木の折れるバリリン！という音にぎよつとしながらも坑道の構造を知らぬ彼女にはその危険度の知覚はない。他の鉾山と違ってこの地形は極めて脆いのだ。この坑道の真上には花岡川が流れている。マイトを七ツ館三番坑の切羽で待つのは「政吉おど」たち日本人と朝鮮人である。バリリン、バリリンと坑木の折れる音が不気味に響く。鉾床採掘に本来不可欠の保安対策はされていない。それを言えば「非国民」とされる。その時、一挙に坑木の折れる音がしたかと思う間もなく激しい震動、鼓膜を破るほどの鳴動、煽り風が襲う。そしてあつという間に鉾体が、岩盤が、水が彼らの上に落ちかきなつた。マイト運びの責任を果たしたタツ子が坑外に出たい一心で泥土に足をとられ天井に頭をぶつけないながら先を急いでいた時だった。逃げるーッ！の叫び声を聞くがもはや逃げ切れない。事故を知った坑外にいた鉾夫・鉾婦たちは泥を出せ、水を抜けと死にもぐるいで救出に奔走し、会社にも必死で抗議・要請するが会社の対応は冷静だ。鉾夫・婦は人間ではなく安上がりの増産道具なのだ。化け物のようになつた瀕死の朝鮮人一人を助けただけで、鉾夫たちの憤怒の抗議をよそに会社は坑口を塞ぐ。日本人十一人、朝鮮人十一人が生き埋めされる経過が戦慄的に描かれる。

事故から約ひと月後、花岡署長、鉾山事務所の庶務課長、憲兵や巡査、土木の親方ふうの男、それらの部下の棒頭の待つ駅に臨時の有蓋貨車が尉官と兵隊、さらに国防服と戦闘帽で棍棒を手にした男たちに後ろ手に縛られたまま引き立てられて、骨と皮、顔と頭蓋がシャレコウベのそれでも生きていることを煙燻で知ることができる中国人が降り立つ。歩けずにのめつた者の背中に棍棒がとぶ。花岡川の水路変更工事を鉾山側は鹿島組に請け負わせ、鹿島組は「軍」と結んで現地の華北勞工協会を通して「軍管」の収容所から受け取ってきた、「搬送」途中の入水自殺、反抗による銃殺、病死の七名が欠けた俘虜とされた二九六名である。人数確認後まずさせられたのは「宮城遙拝」の最敬礼。この鉾山には四百人の強制徴用の朝鮮人坑夫と米兵俘虜がいたが交流も許されず銃を持った兵の監視下におかれる。彼らは筵すら敷かれぬ板床に木枕だけで毛布もないすし詰め場所から、食物も水すらまともに与えられずに労働にかり出される。既に体力の尽きている状態での飢えと過重労働は動きを鈍くする。そこに棍棒が飛び半殺しにされ、そして本当に殺される者が続出する。現場回りの監督たちは能率をあげさせようと躍起になるが中国人にはモッコ

を使う習慣がなくバランスがとれない。「これまでなんべん教えるんだ。あほう!」「見ろ、てめえら。天皇陛下の国のモッコというものはナ、おめえらチャンコロの国のバイスケたアちがうんだ」と怒声と共に棍棒が唸る。血を噴き出して倒れ込むと「だらけやがる」とまた棍棒。補導員が喚き怒鳴る日本語のわからない俘虜たちは「鬼」のリンチで殺されていく。厳しい冬がやってきた。逼迫した戦況からこの鉾山にも空襲警報が出るようになる。増産体制はさらに強化され、四五年六月始めには第一船で連行された二九八名が一年も経たないのにリンチや拷問、飢えによって八六名になつていた。「労働資源」補強のためにこの年四月に第二船五百名、第三船九十名の中国人俘虜があらたに送り込まれている。

この約一年間に展開された俘虜たちの動静および彼らの扱われ方を黙視できず、ひそかに連絡をとろうと図ったり、見回りの目を盗んで僅かな食べ物をもつと通り道に置いたり日本人・朝鮮人坑夫たちの姿が作品には描かれているがそこを述べる余裕はない。しかし、蜂起の中心人物となる第一船俘虜の隊長耿順について触れないわけにはいかない。彼は惨殺された二百余名のその惨殺され方を胸に刻みつけていた。後続の俘虜を含めて総員六七〇名の今、立ちあがらなければと彼は覚悟を固める。まだつかみきれてはいないが二船・三船の仲間自分たち以上に衰弱している。彼は、俘虜用に配給されている食料が鹿島組の自分たちの家族の腹に入れるだけでなく、鉾山側の奥さん連中に売ったり、課長や署長の家に運んだりしていることを知っている。先頃、仲間の一人の「ひとの吐いたヘドにつらをつけて土までなめていたちくしょう」ぶりを怒った補導員に耿順は殴打を命じられて拒否、次に命じられた張金亭も拒否したために三人は全員の前で六人の補導員にリンチされ、あげくに食料半減の罰（労働の半減はない）を課されたことがあったが、草を食べたといつて別の仲間も足腰のたたぬほど殴られた。これでは全員が殺されてしまう。六七〇名は農民出、劳工出、知識層出身と判別でき、抗日軍に参加した劳工出が多く、知識層がそれに次ぐことを見抜き、耿順は張金亭に蜂起を相談する。張は自分の組の意思統一をはかることを約束する。卑劣な人間は何時の時代にも何処の世界にもいる。通訳の任鳳伎に代表されるが己の腹を満たすために魂を売って補導員たちのご機嫌をとり、彼が食料倉庫に出入りの出来る役を与えられたことの思惑を飲み込んで俘虜用の食料を横流ししていたが、保身のために耿や張が抗日であることも告げている。耿や張は一挙手一投足を監視されていた。

餓死者続出に、耿順が俘虜の多くは非道に捕縛された非戦闘員である、国際法に則った俘虜待遇をしてほしいと、補導員に抗議、嘆願し、「国際法の俘虜待遇だア?」「いい気になりやがつて」、「いま日本が、大東亜戦争の最後の段階を勝ちぬくために、艱難辛苦をものともせず、一億一心邁進しているこの厳然たる事実を、おまえはまだ知らんのだな。しかも、勝利は近い。もうすぐだ。」きさまはまだ支那があると思つてタワゴトぬかしているが「きさまらの国がどこにある。生き場所がどこにある。この皇国にいればこそ、きさまたちは生きていられるんだ」、宮城遙拝が嘘なら生きてる資格などない、そんな奴らに食わす無駄飯などはない、と投げ飛ばされて失神する。明日から「第五次建設週間」が始まる。さなる労働強化である。そして蜂起は決行された。だが、彼らは一網打尽にされ、残虐の修羅場が共楽館前庭で繰り広げられた。首謀者は自分だ

と主張した耿順はもちろん、共謀者であることを堂々と主張した多くの者が、棍棒、竹刀、ホース、手錠、針金、水をはった四斗樽などの拷問道具で殺されていき、息のある者は連行された。任の姿は消えている。事件を知って駆けつけた鉦夫たちや、それより早く共業館前広場に駆けつけて血の海のなかでなされる残虐場面に、「うー、つらましねえこと（むごたらしいこと）するもんでねえかヤ」「鮭っこみてえに」殺されて「死んだ数の方、多いでねえかヤ」「鬼達だベナ、まず！ あのおつたたきアがることよ」と口々に非難、抗議する女たち、とりわけ激しい怒声を放ったのは、息子を落盤で殺され、孫のタツ子を七ツ館で生き埋めにされた「オスエばあさん」だが、彼女は血相を変えた警官に署へ引き立てられた。坑内作業を終えて出てきた者たちが駆けつけて抗議するが国家権力に敵うわけがない。作品は引き立てられながら「二度、こつたらことに、おれら、させてなるか、……」「待つてけるよ、それまでな、……待つて……」で終わる。

七ツ館生き埋め事件と中国人俘虜蜂起事件の二事件のみの細叙ならルポルタージュと言えるがこれは小説仕立てされている。事件は真実だが鉦山労働者たちの差別視のない日本人と朝鮮人との愛情関係や、中国人俘虜たちと連携をはかろうとする、時代が時代だけに手に汗を握る迫力で反戦につながる抵抗運動も描かれている。

ところで中国人俘虜はどうして俘虜になり、どのようにしてここまで連れてこられたのか、そしてここでの待遇はどうだったのかは想像による作り物ではなく、綿密な取材、調査によっているので既に紙幅を失っているが、中国・韓国・北朝鮮の靖国神社参拝批判や凄惨な拉致の問題の根に関連すると考える立場から敢えて紹介しておきたい。俘虜たちを連れてきた鹿島組の者たちを鉦山側が慰労した、ビフテキ、魚フライ、鶏肉、その他土地の料理をテーブル狭しと並べ、県の銘酒「爛漫」までととのえ、白粉をぬった女のサービスつきの宴会で交わされた「あいつらの経路」である。俘虜にするのは「現地の軍」で、「百姓のくせに」八路を匿った者、抗日軍の連絡員だった者、橋梁破壊・鉄道破壊などの工作に関わった者、さらに、市場で買い物しているところを拘捕と無実の罪をきせて連行した住民、親子連れで町の食堂で食事の親子に、まあこい、と手錠をかけて引つ張ってきた者などで、石門の収容所には二、三千人いたという。逃亡できないように全員丸裸で同方向向きにしゃがませ、周囲には三千ボルトの鉄条網を張り巡らせていても逃亡者が出る。俘虜が寝るなんてことは許されない。労働先が決まるまで何日でも何十日でも地面にじかにしゃがませておく。勝手な格好をしたら「ごんごんやる」ので、毎日五人十人、日によつてはそれ以上が「くたばる」。「ふーむ。で、そいつは、焼くんですか」、やつら「ちくしょうども」に大きな穴を掘らせそこに投げ入れさせる。逃亡はその作業中が多いがすぐつかまり銃殺か、土牢にぶちこんで「飢え殺すか」、ときにはくくりつけて藁人形がわりに実地演習として兵隊に銃剣で突かせる。五番目くらいまで。血で真っ赤になるのを俘虜たちに見学させる。見まいと下向いたやつは上向かせる。「それでもとうとう、一ぴきだけ逃がしちゃった」。鉦山側の者が食料について質問する。一日にコーリヤン粥一ぱいかマントーひとつだけで、水は三日間一度もやらなかった。船で死んだ者は海に放り投げ、汽車で死んだ者は

途中の駅長に押しつけた、福島の手前で水への飢えから出ない小便を無理にだしてそれを飲んだものがいた。アルコールで真っ赤に染まった顔の鉾山長が「そいつア……ほんとの自給自足だ。はっはっはっは」と面白がる。鹿島組は、この度は「軍以上」でゆく決心だと応じている。蜂起は起こるべくして起こったのだ。中国人、朝鮮人の強制連行と連行された彼らの凄惨な労働、殺戮が宮城遙拝で始められている。皇国の為が大義名分だった。「一木一草にも天皇制がある」（竹内好）はまさに至言と言えよう。

結び

松田解子の生涯の代表作は『おりん口伝』三部作だが、その執筆着手に『地底の人々』は不可欠の作品だった。秋田の山褰のなかの鉾山で厳しい生涯を送った解子の母を、日本の至る所にいた庶民の普遍的な女性像として描きたい思いは早くから解子の内部で温められていたが、『地底の人々』を書いたことで、独占資本と呼ばれる階級の残忍な利潤追求が「頭部」と「抱合」していることを知り、その一人にすぎないおりんを通して民衆に哀苦を嘗めさせる社会の構図を描きたいの思いが噴き出したという意味のことを語っている。

『おりん口伝』『おりん母子伝』『桃割れのタイピスト』三部作は日本の近代の実質を問う庶民史でもある。松田解子の人には、金や名譽、義理などに惑わされない理念や理想が息づいている。したがって彼女の文学のことは重く、空虚さはない。その礎石は鉾山労働者として生き通した母の生涯とそれに繋がる自己の生育から与えられている。三部作については別稿に譲る。

- (1) 『女子文壇』第九年第五号（一九一三・四年）掲載「婦人職業案内（四）タイピスト」によると一九一三（大正二）年はじめにおけるタイピストは、女性の先進的花形職業で需要も多く、和文タイピストの初任給は十五円〜二〇円で個室を与えられ、毎月または半期ごとに賞与も支給されたとある。
- (2) 日雇い労働者。当時日当が二四〇円であったことから「ニコヨン」と呼ばれた。